

広報

# おやすみ



2017

4

No.147

見渡す限り 春の色

# がんばる大洲っ子



## クラスが明るくなるような先生になりたい

大洲小学校 6年（現：大洲南中学校 1年）

向井 鈴香 さん

私は小学校 2年生まで南久米小学校に通っていましたが、学校の統廃合により 3年生から大洲小学校へ通うことになりました。初めは少し不安でしたが、同じクラスに幼稚園のときの友達がいだったので、自然とほかのクラスメートとも仲良くなり、楽しい学校生活を送ることができました。6年生のときには運営委員として、国旗と校旗の掲揚や集会のあいさつなど、私なりに一生懸命頑張りました。小学校の総合的な学習の時間でさまざまな職業について調べたとき、私は学校の先生という職業に興味をもちました。母には「先生は放課後や休みの日にも仕事があるから大変だよ」と言われましたが、それでも私は先生になりたいと思います。中学生になると勉強も難しくなると思います。生徒から信頼される先生になれるよう、夢に向かって努力します。

## 4月の納税など 納期限は5月1日(月)です。

税 別	4月	5月	6月	7月
市 県 民 税			1期	
固 定 資 産 税	1期			2期
軽 自 動 車 税		全期		
国 民 健 康 保 険 税				1期

市税などの納付は、便利で安心な「口座振替」を。

## 現在の 大洲

	人の動き(先月比)	交通事故(昨年同期)
人口	44,774人 (- 54)	件数 10件( 29件)
男	21,412人 (- 19)	死者 0人( 1人)
女	23,362人 (- 35)	負傷者 11人( 41人)
世帯数	20,118世帯(- 26)	

(2017年2月末現在)

## CONTENTS 目次

- 2 ページ がんばる大洲っ子・今月の表紙
- 3 ページ～ (特集)獅子舞がつかないだトルコと日本
- 8 ページ～ シリーズ
- 10ページ～ おおずニュース
- 16ページ～ おしらせピックアップ
- 22ページ～ 情報ひろば
- 24ページ 集まれO級若モン
- 25ページ～ 図書館・保健センター・各種相談ガイド
- 28ページ がんばるひと  
(おおず歴史華回廊案内人倶楽部)

## 今月の表紙



3月1日(水)に五郎の河川敷をおとずれました。「五郎花を愛する会」のみなさんにより整備されている畑では、今年も菜の花が鮮やかに咲き誇っていました。少し腰を落とすと、黄色いじゅうたんがどこまでも続いているように見えました。今月号9ページのご当地クイズは、この菜の花畑に関する問題です。

(特集)

# 獅子舞がつかないだ トルコと日本



矢野 美香さん いろは 彩映さん リエ 吏絵さん かつこ 勝子さん  
ゆうじ 祐士さん ひろのり 啓士さん カフマン・ジャーヒットさん こういち 公一さん めいさ 愛咲さん

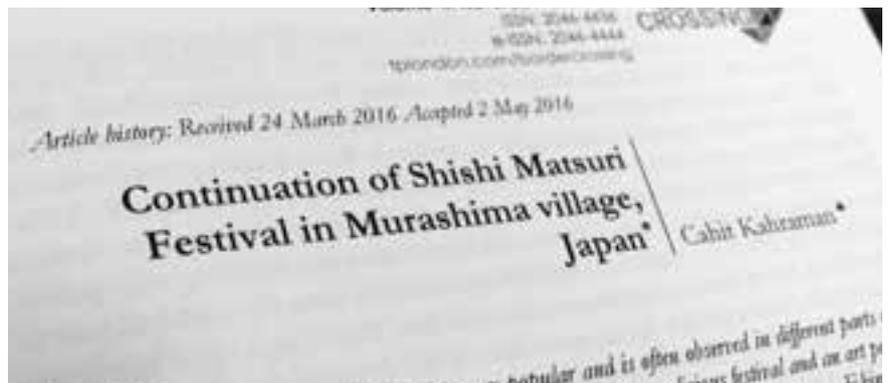
## わがまちの獅子舞が海を渡ったー

菅田町村島地区で大正時代から続く獅子舞。現在は村島獅子保存会のみなさんが伝統文化の継承に努め、毎年地方祭の日に各家庭を巡り、舞を披露しています。

そんな村島地区の獅子舞をテーマとした論文が昨年、イングランドおよびウェールズ地域の「Transnational Press London」社から発行された学術雑誌「BORDER CROSSING」に掲載されました。村島獅子舞の歴史や、一つひとつの演目が詳細に書かれているほか、住民にとって獅子舞とはどういうものか、若者減少や洪水被害などの問題に直面しながら、なぜ続けることができるのかといった内容が記述されています。執筆したのは、日本文化を愛し、ふとした縁から大洲の家族と関わりをもつようになったトルコ人男性でした。



学術雑誌「BORDER CROSSING」2016年冬号



論文タイトルは「村島での獅子祭り行事の継承」

# 出会いは14年前――

## 矢野家に突然の来客

菅田町村島地区の矢野公一さん一家と、トルコ出身のカフラマン・ジャーヒットさんの出会いは平成15年のことでした。当時高校生だった矢野家長男の啓士さんが、先生からホストファミリーの話を持ち掛けられ、手を挙げました。「あの時、なぜ受け入れようと思ったのか、全く覚えていない」と啓士さんは笑って話します。

「正直、見知らぬ外国の人を急に家に泊めるのは抵抗があった。何より、トルコの人のイメージが全く湧かなかった」。公一さんの妻・勝子さんは、急な話に驚きを隠せませんでした。

## 親しみやすい勉強家

しかし、いざ会ってみると、勉強熱心で純粋な姿に、戸惑いはすぐになくなっただけです。以来、愛媛に来るたびにホームステイを重ね、「今では矢野家の三男。ジ

ジャーヒットも『ただいま』と言ってわが家の玄関を開ける」と勝子さんは笑みを浮かべます。当時高校生だった啓士さんも31歳に。「海外のニュースは気になるし、トルコと聞くと、すぐに顔が浮かぶ。ジャーヒットのおかげか、外国の人に対する抵抗はなくなった」と、今では家族のようなカフラマンさんと肩を組んで話してくれました。

## 地域にとけこむ

過去の滞在中に、カフラマンさんは自転車で地域内を散策したり、公民館で地元の住民と一緒にトルコ料理を作ったりするなど、矢野家だけでなく地域にもなじんでいきました。小学校や中学校でも講師として授業に参加したこともあり、年々、大洲市とのつながりは深くなっていきました。

公一さんはカフラマンさんについて「方言も含めて日本語も難なく理解できるし、とても親しみやすい人柄。積極的に私たち家族や



初めて対面した当時。左が啓士さん、右は次男の祐士さん



現在の啓士さんと

地域に関わろうとしてくれるから、こちらも抵抗なく付き合える」と話します。獅子舞の調査のため、帰国してからもインターネット回線での電話のやりとりが多く、公一さんに質問が次々に投げ掛けられます。「一回の電話で1〜2時間は当たり前。問い合わせの質が高く、こちらも資料を引っ張り出さないといけない。一日に何冊も本を読んでいるし、一つのことに対する探究心には頭が下がる」と、カフラマンさんの学びたいという意欲に、感心していました。



公一さんと。今ではすっかり家族の一員



## カフラマン・ジャーヒット さん

トルコ ナームク・ケマル大学  
人文科学系日本学専攻助教授

日本の伝統・風習に興味を持ち、トルコのアンカラ大学で日本語を専攻して卒業した後、一旦はトルコで就職。しかし、もう一度日本について勉強したいと思い、平成12年に筑波大学に留学。歴史人類学を専攻し、主に日本民俗学を研究。

大洲市に初めて来たのは、「雨乞い」の研究で上須戒地区をおとずれた平成13年。当時、多くの文献を調べ、確信を持って訪問したものの、地元の人たちが雨乞いの儀式についてあまり知らず、詳しい人になかなか出会えなかったとのこと。その際お世話になった市内の高校の先生に会おうと、平成15年に再び大洲市へ。矢野さん一家との交流はそこからスタートし、初めて獅子舞を体験。その後、村島獅子舞の起源や背景について研究を進め、論文を発表。

日本の伝統文化や祭りに詳しく、もちろん日本語も堪能で、5カ国語を操る。「日本の祭りは郷土愛を養う、教育の場だと思います」と話す44歳。

# 大洲とトルコの共通点

## ことば

カフラマンさんは、大洲で驚いたことがいくつもあるといいます。まずは、大洲の方言。「どこ行きよるん」「何しよるん」といった「よるん」という響きが、一部のトルコ語にそっくりだということでした。

大洲市内で滞在中に、突然トルコ語が聞こえたと思い、耳を疑ったことが何度もあるそうです。

## トルコ語（日本語）

- ▽ブユルン（どうぞ）
- ▽ビルミヨルム（知りません）
- ▽チャルシユムヨル（動きません）

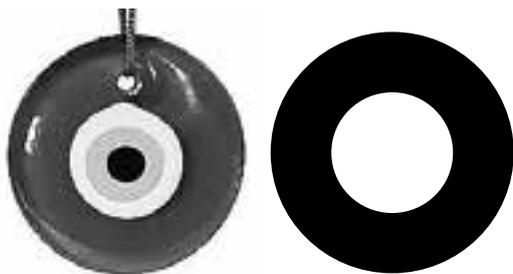
## 市章とお土産

そして一番驚いたというのが、大洲藩主加藤家の家紋を基に図案化した「蛇の目」の市章。トルコの代表的なお土産である「ナザール・ボンジュウ」と非常に似ていることです。

「ナザール・ボンジュウ」は、

青いガラスの中心に目玉が描かれ、キーホルダーやピアスなどさまざまな形で売られていて、魔よけのお守りとして親しまれているアイテムです。「あまりに驚いたので、トルコの友人にも紹介した。私が住んでいるテキルダー市と大洲市で姉妹都市になってはどうかと冗談で話している」とカフラマンさん。

偶然にも、大洲市章の肱川の流れをイメージした青色も同じで、並べてみると確かに似ているかもしれません。



ナザール・ボンジュウ（左）と大洲市章（右）

# トルコでも広めたい すばらしい文化

トルコ人であるカフラマンさんから見た日本の祭り、村島地区の獅子舞について、話を伺いました。

## ―獅子舞の印象は

子どもから大人まで、参加している全員が家族のように見えました。実際に体験してみると、あらためて住民の絆を感じました。

## ―興味深いところは

獅子舞の演目で、なぜこの道具を使うのか、この踊りにはどのような意味があるのかということ、は、研究過程で知りました。



それとは別に、祭りや獅子舞を継続していくには「記憶」や「経験」「魂」などの概念のほか、住民の強いふるさとへの思いが重要ということも分かりました。

村島地区は若い世代が多いわけではなく、そのうえ何度も洪水の被害に遭いながらも、毎年、獅子舞をやめることはありません。私は不思議でなりませんでした。しかし「子どもたちが減り、たとえ獅子頭だけになったとしても、続けていく」「災害でみんな

が落ち込んでいる時こそ、獅子舞をするべきだ」という話を聞き、この地域にとって獅子舞や祭りがいかに大切なものか分かりました。

## ―なぜ論文の題材に

留学当時は、祭りに使われる道具の供養について調査することが主な研究題材でした。

あくまで獅子舞はサブテーマでしたが、獅子舞自体の本来の意味である収穫への感謝、家内安全祈願などに加えて、「自分たちのふるさとの大切なもの」という愛着や帰属意識が養われていることに強い興味を持ちました。

このことをトルコの若者や研究者たちに伝えたいという思いがあり、矢野さんをはじめ、大洲市のみなさんにも協力してもらって、執筆しました。

## ―トルコでの地方祭は

トルコでは、日本のように小さな地域単位での祭りはほとんどありません。

村島地区では、小さい子は2歳から獅子舞に参加しています。そ

の子の成長過程において、練習を含めた祭りの期間が、ふるさとへの思いを育てるものになっていることが、長年村島の人たちと関わってきて明らかになりました。

大洲市内の子どもたちの前で、「コンココ、コンコン」と何気なく机を叩いたことがあります。すると、子どもたちがすぐに「それ、獅子舞だよ」と声を掛けてきて、とても驚きました。地域に根付くすばらしい文化として、トルコでも紹介していきたいです。





村島獅子保存会のみなさん

## 伝統継承が地域活性化のヒントに



現在はトルコの大学で生徒に日本語を教えているカフラマンさん。学生に日本の文化も伝えているほか、獅子舞のような祭りを若者の教育の場として参考にできないかということ、研究者仲間に紹介しているそうです。

「今後も日本文化について研究を進め、論文を発表してもっとたくさんの人に知ってもらいたい。若者のふるさとを思う気持ちが、地域の経済活性化へつながるのではないかと考えているので、経済学を研究する友人にもぜひ紹介したい」とカフラマンさんは話します。

文化を継承していくのは容易ではありません。さまざまな課題に直面しながら、各地域の住民が努力や工夫をして次世代につなぎ、家族のように集まれる場をつくっています。自分たちの地域にある祭りに誇りを持つ日本人の姿には、海外の人を魅了し、心をつかむものがあります。